

村田会頭定例記者会見コメント(要旨)

○会頭交代について

本日の常議員会で、会頭を5月11日に退任する意思を表明した。同時に、5月11日に臨時議員総会を開催し、新会頭に立石副会頭を選任する旨が承認された。

2001年2月2日に、稲盛前会頭からご指名を受け、会頭に就任して以来、6年3ヶ月の間、私を支え、協力いただいた副会頭の皆さん、議員・会員・職員の方々、また本所事業に格別なご指導をいただいていた京都府、京都市、関係諸団体の皆さん、その他、多くのご関係各位のご支援に、深くお礼申し上げます。

立石氏は、平成10年4月から副会頭を務めて頂いており、オムロンの社長として87年から16年に亘って経営に当たられ、現在は会長をされておられる。1990年代の失われた10年といわれる経済界の苦難の歳月をくぐりぬけ、2002年の大底から強力なリーダーシップで会社を立て直され、高収益期企業へとV字回復を果たされた。また関西経済連合会副会長を98年から務められ、関西文化学術研究都市の推進機構理事長や「けいはんな」の社長として、学研都市の発展にも大いに貢献してこられた。その高い経営手腕と、豊富な財界活動の実績から、本所の会頭として、また日本商工会議所の副会頭として、人格、識見とも相応しい方と認識している。京都の経済界をリードされ、京都の発展に尽くされることを期待している。

私が会頭を引き受けた2001年は、バブル崩壊による最悪の景気低迷期で、さらに9・11による世界景気の冷え込みがあり、まさに大どん底からのスタートだった。丁度その4月に小泉内閣が発足し、構造改革を政策の中心として、規制緩和、自由経済の元での日本の競争力の再構築を計られた。景気は日経平均株価が8000円を割り、日本経済が底割れをするのではとの危機的局面もあったが、2002年に底を打つと徐々に回復し、2006年末には戦後最長の景気拡大を記録するまでになった。その間、私はぶれることなく小泉政権の改革路線を支持してきた。

私は会頭に就任して、「美感都市・京都」を掲げ、ハードウェアとしての美しい京都の自然、建物、街並みと、ソフトウェアとしての京都の人の美しい心根に根差した街づくりを提唱してきた。京都は、町衆が学校を作り、祭りや行事を維持、継承してきた。近年では京都賞や百人一首の時雨殿、ロームの年末イルミネーションなど、京都を想う事業も活発だ。自分の街に誇りを持つには、自分の街を良く知ることが大切であり、その想いが京都検定に実を結び、京都ブランドの振興につながった。

平成14年に創立120周年記念事業として小倉百人一首プロジェクトが始まり、時雨殿の建設、百基の歌碑建立を進めることが出来たことは誠に感慨深い。また、京都迎賓館が、平成17年4月に完成したのを機に、2008年サミットの京都誘致運動に京都をあげて取り組んできた。結果は、北海道での開催が決まり、京都にとっては大変残念な結果となったが、京都が一丸となって誘致活動を進めてきことは、今後の京都の発展につながると確信しており、今回運動してきたこの力を、8年後のサミットへとつなげたい。

本所の会員は、中小企業が94%を占め、これらの発展なくして京都の活性化は進まない。中小企業振興と京都観光の振興には、京都府、京都市と緊密な連携を取りながら努力してきた。また、京都の2地域に知的クラスター事業が選定され、京都産学公連携機構を設立し、産学公連携を促進して新産業の創出にも取り組んだ。平成16年からは、「ダボス会議」の科学技術版ともいえるSTSフォーラムが京都で毎年開催されるまでに定着した。

この6年間、微力ではあったが、京都のために一生懸命取り組んできたつもりだ。決して十分なことができたとは思っていないが、これからも一京都市民として、京都の発展のためにお役に立ちたいと考えている。

記者の皆様には、6年間、本当によく京都発の記事を書いていただき、心より感謝しているとともに厚く御礼を申し上げます。

平成19年4月24日